

令和7年度 まちづくりトーク 主な意見

開催日:10月9日(木)

会場:甲奴健康づくりセンターゆげんき

参加者数:44人

◎テーマ①:中学校再配置計画と今後のまちづくり

【趣旨説明(甲奴町振興協議会連合会)】

中学校は、地域住民のコミュニティの形成に大きな影響を及ぼし、地域住民のきずなや、愛着心を形成する。また、小・中学校の存在は、定住対策やまちづくりの柱である。今回の学校再編計画では、各地域の持続可能なまちづくりの視点が反映されていない。保護者や地域の声を聞き、一旦立ち止まり、再考してほしい。

| 参加者の発言 | 市の発言 | 備考 |
|---|---|----|
| 甲奴地区の子どもたちが、吉舎中学校に行くとなると、通学に時間を取られ、何かに頼らないと通学ができない。不便さを強いられることになる。義務教育の段階において、過疎の町とはいえ、地域から学校を取り上げることはおかしい。地域の教育力を信じてほしい。 | 地域における中学校の存在の大きさは理解している。誰もが学びたいと思える学校づくりを引き続き行っていく。子どもたちへアンケートを行っており、学校生活で一番楽しいことは何かという問いに対して、一番多い回答は「友達」であった。たくさんの友達とつながることに魅力を感じている。三次に帰ってきたという子どもを育てるためにも、先を見据えた教育をしていく必要がある。少子高齢化の中で、自分だけではなく、周りを幸せにする、自分で価値を生み出せる力が大切である。中学生は思春期であり、いろいろな人と会うことも重要であることから、クラス替えができるクラスが必要と考えている。学校に行きにくい子どもの特認校も計画している。 | |
| 甲奴中学校は、まだ統合する時期ではない、地域にあるから通学しやすい。自力で通えなくなると、不登校が増えるのではないかと。時間がかからない。吉舎中学校へ行っても、甲奴地区の学習や地域とのつながりは無くないと言われているが、やはり吉舎地区を中心に学ぶようになる。アメリカス市とのつながりは、これまで何十年も交流してきた甲奴中学校が中心であり、大事にしてほしい。中学校がコミュニティの中心として、地域住民がつながっている。甲奴町へ帰り、住みたいと思ってもらうためにも、地域に学校があるべきである。 | ・通学はスクールバスで送迎することを保護者へ説明している。学びをより良いものにしていくために、甲奴中学校、吉舎中学校、三良坂中学校、日影館高等学校の先生による協議・情報交換の場も設けている。それぞれの地域の魅力についても学習するよう計画する。 | |
| 不登校の子の学校をつくるとはいえ、市内中心部につくられたら、甲奴地区の子はどのように通うのか、各地域に中学校がないとまちづくりができない。小学校だけではコミュニティスクールが成り立たない。 | ・今回の再配置方針については、財政面が理由ではない。大事にしているのは、子どもたちをどのように育てるのかという観点である。子どもたちには、社会問題や課題と向き合わせていくこと、いろいろな人と関わること、あつれきなどを乗り越えていくことを経験させることが重要となる。地域のつながりや文化を支えていくためには、高齢化が進む中、地域を越えた関わりなどが必要である。甲奴地区は寛容性があり、いろいろな人を受け入れる力がある。外国との連携も続け、平和という核となるものもあり、それを残して広げていく大切な要素がある。甲奴と吉舎と三良坂地区、そして日影館高等学校をつなげて、関わった人たちの思いや、大切なものを持続可能なものにして継承していく。 | |
| 学校の統合は財政が厳しい状況が理由であると思っていたが、市の財政状況は良くなっており、統合を急がなくても大丈夫ではないかと感じた。小規模校では、誰でも付き合ひ、助け合わなければならず、社会性が育つと実感している。教育のために小規模校を選び、甲奴地区に定住を考えている家族もいる。 | ・三次市の財政について、借金は減少し、基金は増加しているが、経常収支比率が高く、自由に使える財源に余裕がない状況である。学校の再配置は財政が問題ではない。やはり教育は教育たるものをどうしていくのか、それが今回の教育のあり方の根源である。 | |
| 学校をテーマとして出してもらい、自分だけが問題としていたのではないとわかり安心した。教育は地域の象徴であり、学校を守りたいと思った際に、住民は何をすべきか。住民の責任は何かを教えてください。 | ・少子化や社会状況の変化に伴い、学校再編の時期はいつくる。自分の母校もなくなり、寂しい思いをした。日本の人口は急激に減少しており、市の人口も子どもたちも減少していく中で、今まで通り公共施設を維持できなくなっている現実を受けとめなければいけない。地域の声を尊重し、子どもたちの未来のために再編計画などを示していく。地域懇談会や、地域との話し合い、保護者との話し合いなど、いろいろな機会を通して対話し、今後の教育のあり方を一緒に決める時期であると思う。経験したことのない人口減少の中で、どう地域づくりをするか、手探り状態で前に進めているところである。アメリカス市との交流は、交流協会の財源も枯渇しかけていた。甲奴地区から始まった大切なものであるため、基金を作って国際交流に充てることを決断した。市内全体の子どもたちにも体験をする機会ができるよう、いろいろな形で向き合っていく。引き続き、甲奴地区の文化や地域づくりをどう守っていくか、対話を重ねていきたい。 | |
| ・小学校・中学校の保護者会を立ち上げて、保護者へアンケート調査を実施した。再配置についてなどアンケート内容は多岐にわたる。保護者からの意見や要望を教育委員会にも提供しているので、意見に対し具体的に真摯に回答してほしい。 ・個人の意見として、少子化の中で、自分の地域に中学校があり続けることをどこまで望み続けるべきか考える時期が来ていると感じている。中学校は地域の活性化の核になっている。今後、いつかの段階で中学校がなくなっても、この甲奴地区であれば、地域の活性化は持続できる、またはそれ以上に向上させていけると信じている。保護者が将来を見据え、方向性を示した時に、保護者が出した意見に対して、地域や行政で応援していただき、支えてほしい。 | ・引き続き、しっかりと対話を重ね、議論や協議を進めていく。 | |
| 給食の試食会に行ったが、給食センターの食事量は少ないと感じた。地元食材を使った甲奴地区の給食センターを残してほしい。きちんとした給食を子どもたちに提供することは子どもの権利である。財政の問題ではないというが、関係があるように感じる。 | 給食の量は、学校給食摂取基準に基づき、給食センターで対応している。調理場の老朽化や新しい衛生管理基準で、安全・安心でおいしい三次らしい給食を提供していく。地元の食材も継続して使用し、しっかりと内容の給食を提供していく。 | |